

音楽科教科テーマ

「『音への気付き』から始まる音楽の学び」～音楽的な“見方・考え方”を深める鑑賞活動の創造～

〈本校の生徒の実態〉

現代の中学生にとって、音楽は日常的に接する身近な存在である。実際に、本校では78.6%の生徒がJ-POPやK-POP、洋楽などをスマートフォンやストリーミングで楽しっており、56.5%の生徒がピアノやヴァイオリンなどの音楽教室に通っているという実態がある。

しかし、楽曲への関心のあり方には偏りが見られる。好きな曲の理由を尋ねると「歌詞がよい」「○○の作った曲だから」といった回答が多く、音楽そのものよりも歌詞や背景、話題性といった外的要素に注目している傾向が強い。実際に、クラス合唱の選曲においても「歌詞が自分たちに合っている」という観点で選ばれることが多く、「音楽の構造的魅力」や「響きそのものへの興味」は育まれていない状況である。

また、標題のない絶対音楽(例:バハ「フーガ ト短調」、ベートーヴェン「交響曲第5番ハ短調」など)に対しては、構造や音の変化に着目した分析や批評が困難である生徒も多く、ワークシートの記述からも、抽象的な音を具体的に捉える力や分析する視点の不足が見られる。

これは、従来の授業が歌詞や背景といった具体物から音楽を捉える手法に偏重していたため、「音への気付き」を起点とした音楽の本質へのアプローチが十分ではなかったことに起因していると考えられる。

〈研究が目指す方向性〉

文部科学省『学習指導要領解説(音楽編)』では、音楽科の学習を以下の5観点から捉えるよう示されている。

- 1 音楽の素材としての音
- 2 音楽の構造
- 3 音楽によって喚起されるイメージや感情
- 4 音楽の表現・批評における技能
- 5 音楽の背景となる文化や歴史、歌詞など

これらは独立した観点ではなく、「①音」や「②構造」の理解が土台となり、そのうえに「③イメージ・感情」や「⑤背景」の理解が重層的に広がると考えられる。そしてそれらを通じて、「音楽的な見方・考え方」が働き、生徒は自ら音楽を読み解き、意味付けし、表現する力を育んでいく。

したがって、本研究では、歌詞や背景よりも先に「音楽の素材・構造」へ着目させる授業デザインを重視し、「音から始まる鑑賞活動」の可能性を探っていく。

〈本研究の目的〉

本研究の目的は、「音への気付き」から出発し、音楽を多面的に捉える視点＝「音楽的な見方・考え方」を育成することで、創造的・主体的な学びへとつなげていくことにある。

生徒が音の変化や構造に意識的に耳を傾けることによって、音楽そのものへの理解が深まり、そこから自己の感性に基づいた表現・創作活動へと発展していく。鑑賞活動では、曲の背景や歌詞に頼らず、まずは音楽の響きや構造に触れることで、「なぜそのように感じたのか」「どうしてこの曲に意味を見出したのか」といった主体的な問いと批評的思考が生まれる。

歌唱活動では、歌詞の解釈に先んじてメロディや伴奏の役割に注目させる。鑑賞活動では、背景情報よりも音の素材や構成、音楽的特徴に着目するなど、「音から始まる学び」を軸に指導を展開する。その中で、生徒一人ひとりの聴く力・考える力・表現する力の育成を図り、音楽の本質的な魅力に迫ることが本研究のねらいである。

今年度はその実践の一環として、生徒が自分の選んだ楽曲を対象に、音楽的特徴を根拠に「なぜその曲が好きなのか」を説明するプレゼンテーション活動に挑戦する。この活動では、旋律・リズム・構成・使用楽器・雰囲気などの音楽的要素に着目しながら、言語化する力を育成し、音楽を「聴いて終わる」から「考え、伝え、共有する」活動へと発展させることをねらいとする。

〈参考文献〉

学習指導要領解説 音楽編

小川昌文 他(2023)『よくわかる音楽教育学』ミネルヴァ書房

加藤徹也 山崎正彦(2018)『中学校 新学習指導要領 音楽の授業づくり』明治図書